# MKBSKBBOOK

ギンギンP
五臓ロップ
緒川える

安藤周記
串カツ
みとら
宇宙の塵に
なったのだ

# MKBSKBBOOK

DOJIN
R18
成人向け
18歳未満の
購入・閲覧禁止

大丈夫
誰もいないよ

でも…
あ♥

かわいいよ
瑞希――

ふぁっ…

はぁ～

ちゅ♥

くちゅ

ちゅぱ…

ぴくん

初めての野外プレイに
とまどいつつも
だんだんノッてくる～

プロデューサーも
こんなに大きくして…

ドキドキ

私と…おなじ♥

ちゅぷ。

ちゅ…っ♥

すごい濡れてる…

はい…先程から

はぁっ…はぁ――

プロデューサー私…もう限界で…っ

はぁっ

はぁっ

「じゅん」って――してました!!!

きゃ

俺もだ…イクぞ――

瑞希っ

ぬぷぷ!

ぬぷぷっ!

ドピュ!!!

ごめん…あまり泳げなかったね

してばっかりで

いえ――私もしたかった……ですから!!!

# MKBSKBBOOK


表紙・003
五臓ロップ

004 - 005
安藤周記 @andousyuki

006
目次

007 - 009
緒川える @ogw_L

010 - 011
宇宙の塵になったのだ @maturinojunbi

012 - 013
みとら @MiterandSub

014
五臓ロップ @gozorope

015 - 017
串カツ @hikyourakkyou

018 - 023
ギンギンP @kabiginginp

♥

024
奥付

描いた人. 緒川える
プロデューサー
ドキ
ドキ
スカートを脱ぎました
…どきどき
じゅん♡
もじっ
えっちなこと
たくさん
教えてくださいね

プロデューサーのキス…

んっ♡

ふっ♡

じゅるっ♡

頭がボーとしてきて気持ちいい…っ

んっ♡

あっ♡

じゅるっ

じゅるっ

はっ

ビクッ

ビクッ

ん♡

激しいですっ

プロデューサーあまりそこはっ

んっ

ちゅっ

ちゅっ

ちゅっ

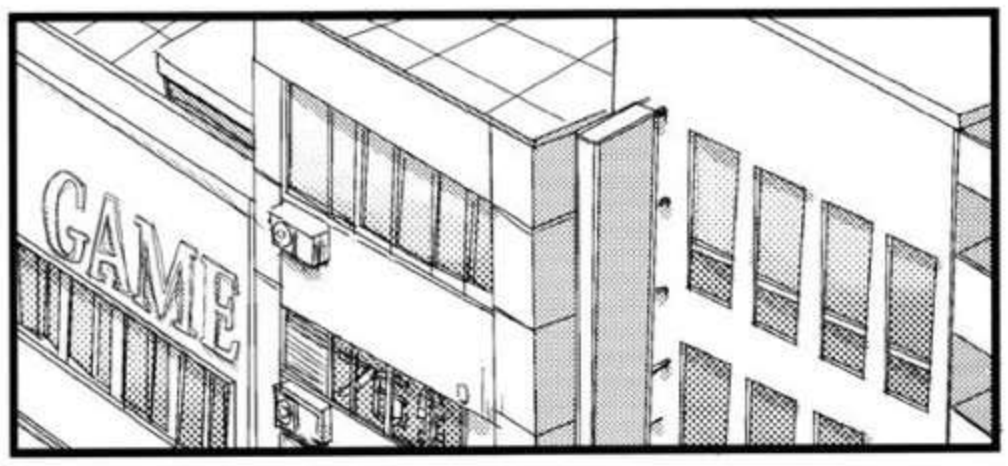
ちゅっ

ビクッ

ビクッ

具合良くなってきたなそろそろ…

ズッ
ぜッ
あんあっ♡
ズボッ
ぐちゅ
プッ
プッ
プッ
あっ♡
ズッ
ぜッ
ぜッ
ぜ


GAME

あの
プロデューサー。

お願いがあるのですが…
……

ちょっ胸が当たってるよ！
ばっ
瑞希は子供だな～よ、よくないぞぉそういうの～

ん～でお願いってなんなの？
ペンが本棚の下に入ってしまって…

この下です
え？そのくらい自分で…まあいいやおじさんが取ってあげますよ～っと

もぐ♡
もぐ♡
たぷん

おいみず…

んん～？ほんとにここに入ったの!?
お、あった

どうしました？固まってますけど
いや、ちょっと今下手に動けないというか…

はい？

勃ってて立てないというか…
……
ピクッ
あぁっごめん!!
ふふ…なんだかんだ言って
私のこと、そういう目で見ていたんですね…
…えっち

ちがう…
いい…
…ヤバい方のヤツ
…ヤバい方のヤツ
…
…
…

ドンッ
ドンッ
ドンッ

@gozorope
たまにはこういうのもイイとおもう……

瑞希！好きだ！
俺と
えっちしてくれ！

賞味期限切れの
スパドリを飲んだ
プロデューサーが
壊れました

プロデューサーへの
気持ちが
らぶなのかは
まだ分かりません

ですが…

…ずるいです

…プロデューサーに
期待されると
断れません

瑞希…！

ドキ
ドキ

カチャ
カチャ

プロデュー
サーの…♥

ぶるん♥

ドキ♥

あ♥
ドキ♥

プロデューサー

私も準備万端です
…ばっちこいだぞ

じゅん♥

あっ
あン

ビクッ

ずぷっ♥

ビクッ♥

瑞希
大丈夫か？

少し
へんな感じです

あっ♥

ビクッ♥

キュッ♥

キュッ♥

プロデューサー♥

パン♥

パン♥

パン♥

パン♥

プロデューサー♥

瑞希っ!!

あんっ♥

プロデューサーの
おちんちん

ぢゅぽ

ぢゅぽ

ぢゅぽ

もっと大っきく
なってきました…

せーし♡

ビクッ

はー♡

はー♡

プロデューサーのがいっぱい…♡

ビクッ

瑞希…

ゴポッ

この気持ちがらぶなのかはまだ分かりません

正気に戻った

やばい

ですが…

プロデューサーに告白されたときやっぱりとても嬉しかったのです

もう一回しましょう

気持ち良かったので

!?

## 真壁瑞希、17歳

ギンギン

いつ頃からだっただろうか。生理の始まる直前は、体の疼きを止めることができなかった。

夜十一時。真壁瑞希はベッドの上でうずくまっていた。何もしていないはずだが、ショーツの中は透明な蜜でぐしゃぐしゃになっていた。疼きに耐え兼ね下腹部に指を伸ばす。

小さな突起が指先に触れた瞬間、軽くも甘い刺激が走る。そこを目がけ人差し指の腹で押しつぶした。

「はぁっ……！」

声が漏れる。今夜は父親は帰ってこない。その事が瑞希の媚声を大きくする。クリトリスを人差し指と中指で擦ると、膣奥から甘い愛液が溢れてきた。

「はっ！　あっ！」

布団を払い除け足を開く。自分の陰核を擦る指を早くするとびくっびくっ！　と全身が痙攣する。

「気持っち、いっ……」

パジャマの上から乳首をこねくり回す。淡くピンクに充血したそれは、瑞希の胸元でテントを張るほど勃起していた。

両手が止まらない。ちゅくちゅくと水音が彼女の部屋の中に響き渡る。

ずぬるっ。ぬちっ。

彼女の中指が膣内に侵入した。

「っ！　ふぅっ…！」

ざらざらした内壁が複雑にざわめき、侵入してきた細い指を締め付ける。手品で鍛えた器用な指を中で折り曲げ、前後に動かす。空気と愛液が混ざる音が振動となり、下腹部から伝わってきた。

胸に伸びていた手を下半身に移し、親指と人差し指で陰核を潰す。

「っ！！」

瑞希は強烈な快楽に負け背筋をのけ反らせた。

「はぁっ…！」

体がより強い刺激を求めているのを本能で感じ取った彼女は、一旦呼吸を整え、短く息を吸う。中指に力を入れ、動きを激しくした。ちゅくちゅくと蜜が指先に絡みつく。彼女の指では膣内の一番敏感なところには指先が届きそうで届かない。それがもどかしく、下腹部の熱がどんどん高くなっていくのを感じた。

瑞希は陰核を再び強く捻り潰した。

「ふっ…！　うあうっ…！」

小さな悲鳴が漏れ、全身が痙攣を起こす。しかし、指から力が抜けることはなく、そのまま抓り続けた。自身の痙攣が刺激となり、また快楽が背筋を走る。そしてまた痙攣を起こす。その快楽は瑞希の薬指を不規則に締め付け続けた。

「……はぁっ」

絶頂が治まり、瑞希は指をショーツから抜き取った。指に絡みつく自分のそれを見て、理性がだんだんと戻ってきた。

さっきまで頭の中で自分にいやらしい事を言っていた人物を思い出し、顔が赤くなるのを感じた。

「……ばか」

愛液でぬらぬらとしている股間と指をティッシュでふき取りつつ、瑞希は呟く。顔が赤いのは先ほどまでの高揚感だけではない。三日後に開催される大型ライブの準備等で相手をしてもらえてない事は理解している。これはその間放ったらかしにしている彼に対する怒りであった。その後、若干の切なさで胸がチクリと痛んだのも、すべて彼のせいである。

枕に顔を埋めため息をひとつ。プロデューサーをオカズにした瑞希はそのまま眠りについたのであった。

＊　＊　＊

分かっていたことではあったが、ライブ当日は朝から忙しかった。Pとして初めての外の会場を借りて行う大型ライブである。前日の時点でもライブの段取り、打ち合わせ、アイドル達のリハーサルと会場内を右往左往していたというのに、ライブ当日は思わぬトラブルが発生するものだ。奈緒の髪飾りが本番当日になくなるところから始まり、エミリーがあまりの緊張で歌詞が飛びかけたりした。しかし、アイドル達自身の実力やスタッフたちの助力もあって、これらの困難は全て乗り越える事ができた。

では何故プロデューサーは休日に自室でPCを叩いているのか。今回のライブの反省点をまとめ、次回に活かす必要がある。そう彼は思い立った彼はレポートにまとめていたのである。自分で淹れたコーヒーを一口啜った。

「プロデューサー、まだですか」

そんなPのデスクの横からひょっこり顔を出したのは真壁瑞希である。彼が一番最初に担当したアイドルであり、三か月程前から恋人関係にある。もちろん、事務所の皆にも内緒にしていることだ。

「あとちょっとだけまとめたら終わるよ」

「……さっきからその言葉ばかりですが」

今日Pはオフだが、彼女はPがレポートの作成を始めてから一時間と経たないうちに現れたのであった。そして何故かとても不機嫌である。何か彼女にとって不満に感じる事でもあったのだろうか。しかし、今日は特に彼女とは約束してなかったはずである。

「えーっと、ところで真壁はなんでいるの？」

「特にやることがなかったので来ました」

「学校の宿題は終わったのか？」

「ライブ前に全部終わらせています。今日はプロデューサーに会いに来たんです。彼女ですから」

しれっと言われた不意の一言にPも思わず恥ずかしくなってきた。周りから頼られ、お姉さんぶっている瑞希からこのような事と言われるとは思えなかった。

「プロデューサー。昨日のライブ、プロデューサーにはどのように映ってましたか？」

「……とてもよかったよ。初めての頃より明らかによくなってた」

それを聞くと瑞希は微笑み、その笑みを隠すように、机で顔の下を隠してしまった。なるほど、どうやら今日はこれが聞きたかったらしい。

「本当にあと少し、十分だけ待っててよ」

頑張った瑞希にご褒美をあげないとな。そう言ってPが瑞希から視線を外し作業を続行した。彼女は早く早くと急かしている。彼女

にしてはなかなかめずらしい。
本当は今日中に片づけてしまいたかったが、来てしまったものはしょうがない。要点をまとめ、明日の自分にまかせる事にした。ノートPCを閉じた。
「よし、お待たせ。それじゃあ何しよっか」
「セックスしましょう」
最後の一口が入ったコーヒーカップに手を伸ばした瞬間であった。瑞希から聞いたことがないような声が聞こえた気がした。あまりに唐突すぎて瑞希に視線を向けると、彼女はネクタイをしゅるりと解き、シャツのボタンをはずしていた。
「な、なにやってんの真壁」
「準備です。どうぞ」
瑞希はPのベッドに腰かけ手を広げた。その姿にPは生唾を飲み込んだ。
「……今日はえらく積極的だな」
「ライブの期間中、全然相手してもらえなくて、結構溜まってるんですよ」
そういうと、彼女は頬を赤らめ、人差し指を咥えた。たぶん百瀬莉緒直伝のセクシーポーズ、なのだろうか。そういえば期間中は忙しく、瑞希には予め言ってはいたがデートと言ったこともやっておらず、また自慰もやってなかった。
日も高いうちにやって本当によいのか、そう言おうとしたが、ベッドで待つ彼女はじっとPを見つめている。こうなったら彼女は何を言っても聞かない、なかなか頑固な性格であることをPは思い出していた。
瑞希の隣に腰かけキスをする。すると瑞希はPの唇を情熱的に吸い立ててきた。覚悟を決めたPは負けじと唇を絡ませ、そのまま瑞希を押し倒したのであった。

＊　＊　＊

ちゅっ、くちゅっ。
二人の抱き合った状態のキスは三分ほど続いている。その間、瑞希のシャツのボタンはPによって全て外されていた。彼女の胸に手を伸ばすと指先が突起に触れた。
「……ブラしてないんだ」
耳元でささやくと瑞希はびくんと体を震わせた。
「このままで来たの？」
返事はないが瑞希は顔を背けている。瑞希の家からここまであまり距離はないとはいえ、アイドルとしてはあまりにも人目を気にしなさすぎではないだろうか。そこまでしてセックスしたかったのか。Pもだんだんと興奮のスイッチが入ってきた。
Pは瑞希の乳首の先端を爪先で引っ掻く。
「うんっ……」
瑞希から初めて媚声が出た。今度はそれをやさしくつまむと、瑞希は喉の奥で声を漏らした。
「しっ……してた方が、よかったでしょうか……？」
「いや、めっちゃエロい」
瑞希の質問に、Pは首にキスをしながらささやいた。瑞希がPにしがみつく。Pの口はそのまま首から下へと移っていった。シャツ

をめくり、鎖骨へと移動していく。Pの視界に取れてしまいそうになるほど隆起した突起が入った。

ちゅっ

しっとりと汗ばんだ乳房の頂を口に含む。

「はぁっ……！」

瑞希の口からワントーン高い声が出た。それを皮切りにPの乳首攻めが始まった。唇と左手で瑞希の突起を転がす。

「っ……あっ……！」

瑞希の喘ぎ声が大きくなってきた。そろそろかと瑞希のショーツへ空いた手を伸ばすと、そこはすでに軽くぬかるんでいた。クロッチをずらし、瑞希の秘部に指をあてる。

「プっ、プロでゅうさ……」

『そこ』ではない、と言わんばかりの切ない声を上げる。が、Pはわざとそこを避けて不規則な収縮を繰り返す肉壺をいじくった。

「プロっ……ああっ！」

Pはぬかるみの中心へ人差し指を突き立てた。愛液を蓄えたそこは、何の抵抗もなく指を受け入れていく。

「やっ……恥ずかし……」

泥沼のように濡れているのだが、そこは侵入者を締め上げる。Pは指を二本に増やし、ゆっくりと前後運動を始める。

「きゃ……むっ！」

悲鳴を上げる寸前で、Pの唇が瑞希の口を塞いだ。Pに抱きかかえられる状態になり、舌が瑞希の舌と絡み合う。上下からPを受け入れ、瑞希の淫道が瞬く間に愛液でいっぱいになっていく。

ぐりっ。

Pの親指が瑞希のクリトリスを押しつぶした。

「んむぅっ！」

瑞希の意識が一瞬飛んでしまう。Pの唇が離れると瑞希は肩でせわしなく呼吸を始めた。しかし、Pは瑞希の呼吸が整ったのを確認すると、愛撫を再開した。

「えっ、はっ、プロデューサー、まっ…!?」

瑞希の抵抗も空しく、Pの口は今度は陰核へと移動した。指先で皮をむき、直に舐め回すと先ほどよりも大きい、艶めいた声が部屋に響いた。Pはもう止まらなかった。感じ悶える瑞希が愛しい。それだけがPの理性を半分飛ばしていた。

「あっ、はあっ……ッ！」

瑞希が絶頂を迎えた。Pの唾液と瑞希からあふれた蜜がベッドシーツにシミを作っている。と、半失神状態に陥っていた瑞希に、その存在を主張するかの如くいきり起ち、Pのズボンの中でテントを張っているそれが視界に入った。

「……ぷろでゅ、さ……」

瑞希の呼びかけにPは彼女の体を優しく抱きしめた。

「最後、まで……やりましょう」

瑞希はPの下半身へ手を伸ばし、肉棒を優しく撫でた。

「私は大丈夫ですから……」

すでに限界まで我慢していたPはその言葉に堪らなくなりトランクスごとズボンを脱いだ。スキンを付け、先ほどまで指を入れていた箇所を一思いに貫く。

「うぁうっ！」

いきなり胎内を広げられ、瑞希は悲鳴に近い声を上げた。普段な

ら彼女の体に気を遣うところだが、先ほどの愛撫と仕事の疲れで貯めるに貯めていた性欲のスイッチがPの脳を支配していた。もはやPの頭の中は彼女に愛情を注ぎこむ事だけになっていた。

「瑞希……っ！」

瑞希を甘く蕩かしながらPが囁く。瑞希はそれを聞き逃した。

「瑞希っ……瑞希っ……！」

目を閉じて快楽を貪っていた瑞希だったが、何度も名前を呼ばれている事にようやく気付き、目を開ける。

瑞希は自分をのぞき込むPの切ない眼差しを見てしまった。早い鼓動を刻んでいた心臓が、きゅっと締め付けられる。

唇が重なる度に、肌が触れる度に、彼の愛情が流れ込んでくる。その温かさに瑞希の目尻に涙が溜まっていく。

「瑞希っ！」

自分をのぞき込むPの瞳に獣のような鋭い光が走る。どうやら彼に限界が近づいたらしい。Pの腕に力が入る。瑞希もそれに答えるように、彼の体を抱きしめた。

ぐちゅっ！

「はぁんっ！」

Pの腰の動きが早くなり、瑞希は高い声を出した。

「ぷろでゅうさあっ！」

カリがGスポットを擦りあげ、瑞希が乱れていく。その様がPをさらに興奮させた。

ずん！　と瑞希の子宮に重い突きが入る。

「あああっ！」

その瞬間、瑞希が絶頂を迎えた。Pの肉棒が激しく不規則に締め上げられる。

「うあっ！」

そこで限界が来たPも彼女の中で果てた。精液がスキンのゴム溜まりに吐き出され、その痙攣を瑞希は膣内で感じていた。

瑞希の中に注ぎ込み、Pは肉棒を抜く。スキンを外すと大量の精液が中に溜まっていた。半失神状態の瑞希だったが、それを見て思わず目を丸くした。

「結構……溜めてたんですね」

「あ、ああ。自分でもすごい量が出たと思うよ」

それだけのザーメンを出した快楽からか、Pも呂律が回っていない。後始末を終えると回復した瑞希は起き上がり唇をかすかに開いていた。それに答えるようにPも彼女の唇へキスを落とした。

「……むぁ」

何度か唇をついばんでいると瑞希はなんとも間抜けな声を出した。へその辺りに何か固いものが当たっているのを感じた。

「……どれだけ溜めてたんですか？」

「……二週間くらい」

それを聞いた瑞希は驚いた。それほどPは今回のライブに打ち込んでいたのだ。

家に帰った後、毎日自慰をしていた自分に罪悪感を感じていたが、今のPにとっては彼女のそんな心境を考える余裕もなかった。

「……もう一回、やってもいいか」

Pの質問に、瑞希は彼の下半身の近くでしゃがみこんだ。舌を使いPの肉棒を舐め回していく。先ほどの射精でべとべとになったペニスが瑞希の唾液へと変わっていく。

「はい。私もまだまだやる気満々です」
綺麗になった剛棒に新しいスキンを取り付けながら、瑞希は微笑んだ。
時計は十四時半を示していた。
二人の交わりはそのまま夜まで続いたのだった。

＊　＊　＊

「今日は帰りたくありません」
二十一時。P家の玄関で瑞希は頬を膨らませながら答えた。
「駄目だってば……もう夜も更けてきたんだし、さっきお父さんもカンカンに怒ってただろ？」
Pがシャワーを浴びている間、片付けをやっている時の事だった。瑞希の携帯に彼女の父親から電話がかかった。門限をとうに過ぎたぞ、早く帰ってきなさいと静かに怒る父親に、瑞希は少し涙目になっていた。
「俺も一緒に謝るから。な？」
「でも、それだとお父さんになんと説明を？」
そういわれ、Pも言葉が詰まった。まさか今までずっとセックスしてました、なんて言えるわけがない。彼女の父親は弁護士だ。捕まるを通り越して、なんやかんや死刑にされそうである。
「ちなみに、お父さんには今日はデートだと伝えてます。……きゃっ」
終わった。脳内でPがそう呟いた。例えかわいくきゃっ、で誤魔化そうとしてもそうはいかないだろう。
「……そう、だな。まあ送りながら考えるよ」
ため息をつきながらPが答える。車の鍵を取り、部屋から出る。彼女を助手席に乗せ、エンジンをかけた。
「ところで、今日は本当はデートに行きたかったんだろ？」
「……実をいうと、そうなんです。だけど、あなたの部屋に入った途端、少しその……」
そう言うと瑞希は口籠ってしまった。その様子を見て、Pもなんとなく察してしまう。また押し倒してしまいそうになる衝動を抑え、車を発進させた。
「真壁って、見た目に反して結構そういうところあるよな」
道中、思わず呟くと、瑞希は頬を膨らませた。
「プロデューサー。私だって花の女子高生です。性欲だって、人並みにあるんですよ」
さっきは途中で口籠ったくせに、しれっととんでもない事を言った彼女に、Pは再びため息をついた。
「……だから、そういう事は言わんでよろしい」
車はそのまま夜の闇を走っていった。
行く先は真壁家。

終

「MKBSKBBOOK」

初　版：2017/5/20 IDOL STAR FESTIV@L 03
発　行：ズッキーニ
責　任：ギンギンP( kabiginginp@gmail.com )
　　五臓ロップ( Twitter @gozorope )

印刷所：栄光印刷 様

この本は同好者の間だけで楽しむために作られた二次創作の同人誌です。
WEBへの転載、ネットオークション・フリマアプリでの転売はご遠慮ください。
R-18です。18歳未満の方の閲覧・所持は固くお断りいたします。

Produced by ズッキーニ